 ©2008 筑波大学生物学類

特集：国際学会参加報告

第 52 回アメリカ生物物理学会@カリフォルニアに参加して

中山　義敬（筑波大学　生命環境科学研究科博士後期課程 2 年）

筑波大学の大学院生国際学会発表者支援制度を利用して、第 52 回アメリカ生物物理学会に参加しました。僕の初めての海外国際学会発表について、体験談をさせていただきたいと思います。

「アメリカ生物物理学会は毎年行われ、幅広い分野から生物物理学者達が世界中から 6000 人以上参加します。」学会のホームページで大会の概要を読みながら、これに参加するのかと期待と不安を募らせました。初めて行くアメリカ大陸で初めての海外国際学会で、自分を一歩成長させられるチャンスだと嬉しく思う反面、海外で英語発表してうまく議論ができるかが不安でした。出発の日まで発表練習をしたのはもちろん、本や友人の話でアメリカのことを勉強して、文化の違いや簡単な日常会話も覚えて準備万端で臨んだはずでした。しかし、アメリカでは入国の時にさっそくつまずいてしまいました。ロサンゼルス空港の入国審査の係官と意思疎通できず、同行した先生のもとに係官が確認しに行く始末になってしまいました。これから自分は大丈夫なのだろうかという不安の方が圧倒的に大きくなった瞬間でした。

なんとか入国審査を抜けて、空港から学会会場のカリフォルニア州のロングビーチへタクシーで移動しました。会場で登録を済ませると早速、翌日に発表が予定されている自分のポスターを貼りに行きました。学会では同じ研究分野の研究者は仲がよく、明日に控えた僕の発表練習を仲間の日本人研究者達が聞いてくれました。「大丈夫、分かるよ」と言ってもらえてほっとしました。前回の国内でやった英語での学会のようにホテルでずっと発表練習という事態は免れ、先生に食事に連れて行ってもらえました。アメリカに来てまでハイネケン(オランダのビール)を飲んでいる僕に先生は「アメリカに来たのだからアメリカのビールを飲まなければダメじゃない」との指摘が飛んできました。いろいろなアメリカの地ビールを飲んでいたら、だんだん緊張もほぐれてきました。酔っぱらいながらもホテルに戻ってきてテレビをつけると、アメリカのテレビは専門チャンネルで構成されていて、一日中、ニュースやスポーツ番組をやっていました。これが英語を聞くとてもいい練習になりました。日本に帰ったら自宅にケーブルテレビを導入しようかと思うほどでした。時差ぼけと緊張で眠れなかったので夜通しでニュースを見て英語に耳を慣らせようとしました。

翌日はついに発表日。昼ご飯を食べたらすぐにポスター会場に向かい、ポスターの前で待機しました。頭の中で描いていたイメージ通りやれば完璧なはず！最初に立ち止まって、ポスターを見てくれた人に「May I explain about this poster?」と思い切って声をかけてみました。「Please」という返事がきた。泣いても笑っても本番、やるしかない。不安だらけだったが、いざ話しだしてみると発表はとても楽しかった。わざわざ聞きにきてくれる人は分かるまで質問してくれるし、僕も一生懸命に伝えようとすると話が弾みました。どうしても分からないときはペンとメモを使って、図を書いて説明しました。論文で名前しか知らなかった研究者に会えた時や「Interesting!」なんて言ってくれる人がいた時は本当に嬉しかった。ただ、一方で自分にもっと英語力があれば、もっと議論ができただろうなという場面もありました。伝えたいことがあったのにうまく伝えられなかったときは悔しい思い出になってしまいました。英語力はとても大事で、もっと努力しようと心底、思いました。

国際学会発表を通じて感じたことはアウトプットすることが大事だということです。

「百聞は一見にしかず、百見は一考にしかず、百考は一行にしかず」

どんなにすばらしい考えをしていても、アウトプットできなければ、誰にも伝わりません。いろんなことを聞いて、実際に見てみて、自分なりに考えて、そして何よりも最後に行動を起こすことが一番大切だと思います。研究者にとっての「行動」とはもちろん研究そのものを含みますが、その成果をアウトプットすることも同じくらい重要だと認識した今回の大会参加でした。

Communicated by Osamu Numata, Received April 23, 2008.